我はいかにして途上国学徒となりしか

塩田 光喜

◉第一七話　限りある身の、力試さん！―祖父定助の死―

祖父定助が病に落ちた。曽祖父慶吾の死の翌年のことである。

一九三五（昭和一〇）年の秋。動悸や息切れが祖父の心臓を見舞った。

その年の国際スパイス・トレードは何とか無事終えることができた。売薬で乗り切ったのだ。

詫間へ帰ると、祖父は床に就いた。

毎年毎年、朝鮮―大阪間の国際スパイス・トレードを一人で切り回してきた肉体・精神的負担が、祖父の肉体を蝕んでいたのだ。ちなみに、この心臓の病はやがて、私と妹にも現れることになる。

詫間や丸亀の医者に診てもらったが一向に回復しない。

最後に大阪へ赴き、阪大病院で、当時、心臓病の権威と言われていた先生に診てもらった。先生は「もうちょっと早く、私の所にきてくれとったら治せたものを」と言ったという。

最後の手立てを失った祖父は、詫間に帰ると病床に臥せった。

翌一九三六（昭和一一）年の二・二六事件の報せは病床のラジオで聞いた。だが、塩田家にとって、それは東京での遠い事件にすぎない。

祖父は商売をたたみ、遺産分与の手立てを打っていった。

祖父は病床に祖母を差し招くと、こう言った。

「うちのお義母さんを信用するんやないぞ。わしが死んだら、息子達を連れて仁尾へ帰れ。仁尾のお義母さんのもとで、息子達を一人前に育ててくれ。」

そして、息子達を並べると、一人ずつ頭を撫でて「お母さんの言うことをよう聞いて、道を開いて行けよ」と告げた。

そして、盛夏七月一五日、世を去った。享年三七。

最後の言葉は「一旗揚げて死にたかった！」であった。

祖父定助が生前、モットーにしていた言葉は「限りある身の、力試さん！」であった。

商売は、致富のためではなく、自分の智恵と力をこの世で試すための道だったのである。

憶うに、この「限りある身の、力試さん！」という言葉こそ、徳川幕藩体制の羈縻から解放された近世民衆の心を駆り立て、近代日本のダイナミズムを生み出したエートスではなかったろうか。

この言葉は、祖母キクの口を経て、息子達の耳に注ぎこまれ、やがては私にも注がれることとなる。